

ふる里学舎

# 佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学舎

〒 290-0265 市原市今富1110-1

☎ 0436-36-7611

発行者 里 見 吉 英

編集者 三 股 金 利

本

音

里見 吉英

「この子よりも一日長く生きたい」

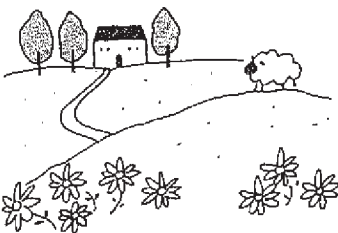
いし、権利も守られるというの何がおかしな気がする。

この仕事に携わって二十年。何となくお母さん達から聞く言葉です。子を思う親の気持ち、特にハンデを背負ってこの世に生を受けた彼らと、その親御さんとの関係は、我々には計り知れないところにあるように感じる。ノーマライゼーション思潮の中、世間では地域福祉・普通の生活・支え合う関係・人権・権利擁護など、きれいな言葉が氾濫しているが、果たして、本人や家族の本音はどうだろう。誰でもそうあってほしいと願う気持ちに変わりはないが、では現実はどうか？ 総論賛成、各論反対、これは施設建設の時など多数の人の本音がでてくる場面であろう。

学舎もこの四月より、自活訓練事業を開始した。四人の寮生が敷地内の一軒家（地域交流スペースの一部）での生活が始まった。開始前、寮生の間では「誰が最初にあそこで生活するんだろう」と、ちよつとした騒動だった。

本人・家族と相談した結果、男性四名での生活が始まった。最初は意気揚々と自信に満ちた生活の始まりだった。一週間が経ち、二週間が経ち、彼らの一部に変化があらわれた。当初は、食事以外は自分達の居室やリビングでの生活を楽しんでいたが、次第にその時間が短くなり、元の寮で過ごす時間が長くなっていった。職員に聞くと、「どうも彼にとつては仲間がたぐさんいる寮の方が楽しいようで四名での生活が寂しくなってしまうようだ」隣の芝生ではないが彼が想像していた生活とはちよつと違っていたようだ。彼にとつては、泣いたり、笑ったり喧嘩したりと大勢の仲間に関わられての生活が気に入っているようだ。まあこれが分かっただけでもちよつとした収穫か。人それぞれである。町の中でのグループホームでの生活を目指してのこの事業であるが、

「障害は個性である」  
「福祉は理想と現実の接点を追いつめることである」  
これはこの仕事をしていく上での私の基本理念である。障害者はこうあるべき、福祉はこうあるべきと決めつけてかかることこそ、アブノーマルではないか。（そういう私もその一人には違いないが）現実の社会の中で、誰がどこでどのような生活をするのが最適なのかを考えることに尽きると思う。



最近、成年後見制度の改正試案が法務省の成年後見小委員会より公表された。その内容を要約すると「痴呆性高齢者や知的障害者などを保護するため①補助 ②保佐 ③後見の三類型による成年後見制度を整備するとともに、財産管理に加え、施設の人退所、介護などの生活問題（身上監護）も後見内容に含める」などとなっている。現行制度では禁治産、準禁治産制度のように、本人の権限を制限することに力点を置いていたのと比較すれば、今回の試案は自己決定の尊重理念（残存能力の活用、ノーマライゼーション等の理念を含む）と本人の保護の理念との調和を旨として柔軟かつ弾力的な、利用しやすい制度を目指している点においてはなおいに評価できる。しかしながら知的障害者のように生まれながらに、客観的、概念的思考能力が劣る場合、特に重度の方達にとつてはどうかという点、試案全文を何度読み返しても（法律用語が多く難解なものもあるが）不十分と言わざるを得ない。よくどんな重度の方でも意志決定はできるということを言う人がいるが、日常生活上の簡易なことであれば職員でも理解できるが、生活環境の問題、ましてや財産の問題も含めたことの決定を本人の意志にそつてということになると難しいというよりも危険な感じがする。

境が最適なのか判断してくれる、利害関係の伴わない人の存在である。親は親の立場で判断するから、成人した彼らの代弁はできないなどということも耳にするが、そういうケースは稀であろう。親御さんこそ本人のことを思い、兄弟のこと、家族のことも含めて現状での接点を追いつめていくに違いない。

現在、ふる里学舎では地域生活支援を希望する本人・家族の方達の登録数が二百家族を越えた。六名の職員が宿直明けや休日も利用してそのケアにあたっている。

他人にはわからない「親子のきずな」「家族の葛藤」理解できるはずはないが、少しでも共有できるものを捜しながらの活動である。「この子よりも一日長く生きたい」ではなく「親より先に逝く子は親不孝だ」となるような環境を目指して。

いつの間にか、本音を言わず、言葉だけが上滑りしているようなこの状態。学舎のもう一つのモットー「寮生も家族もそして職員も楽しく」を忘れず、本年度も少しずつ歩をすすめたい。



（施設長）

毎日、農芸科の皆さんと一緒に機能訓練をおこなっている墓園の桜は、今年には格別にすばらしく、場所柄が加味して思わずこの歌を思い出した程です。私がこの桜に会うのはこれで三回目ですが、これ程美しいと感じたのは今年が初めてです。この仕事に楽しさを感じられる様になったからでしょう。

たまたま家の近くに職員の方が住んでいらして、「パートとして働くのには良い場所があるんだけどやってみたい」という軽い誘いで始めたこの仕事も、丸三年が経とうとしています。私は知的障害者の方々の事を何も知りませんで、試行錯誤の毎日が続きました。お稽古の足しにでもと思って、お金稼ぎにと軽い気持ちで始めた仕事としてはあまりに重く、賃金に換算できない部分で悩み、落ち込む毎日が続きました。

経済効率が叫ばれる世の中で、それとはまったく無縁の場所に存在する彼らの生活の手助けをする職を、アルバイトとして働くことに、少なからず抵抗を感じていました。軽い気持ちで働ける場ではないし、人数合わせ的にパートを配置するのではなく、きちんとした職員を置くべきではないのか。などなど思う事は山程ありました。また、施設というアブノーマルな形態の中で、いかにノーマルな生活を彼らと築きあげていくかは、大変難しく考えさせられる毎日でした。重苦しい一年が過ぎ、二年目に入ろうとしている頃、職場に向かう重たい足が徐々に軽



「願わくば 花の墓にて 春死なん」

この如月の 望月の頃」

盛川 節子

くなり出し、彼らと会う事が楽しみになっている自分を感じた時は、ちよつとした、カルチャーショックでした。

「障害者」かわいそうな人々」という感情が、どこか私の心の中に盛り込んでいました。一年を過ぎて、心の垣根が取り払われ、彼らと接していると妙に自分が見えてしまいがちになり、そこに写し出される自分の本質に反省したり、学んだりしました。私にとってこの三年間は、自分と向き合い、また物言えない彼らにいろいろな事を学ぶ貴重な時でした。

三年の間には、何人もの新人職員の方々が入所、いえ入社していらして、それぞれがめざましく成長していくのを見るにつけ、少なからず焦りのようなものも感じました。「俺、パートさんはパートさんで良いと思う。職員と違って、声かけはやさしいし、発生のお母さんの存在で彼らの逃げ場になつていと思うよ」と言ってくれた青年のやさしい言葉に救われ、明日への活力を見だし、萎える気持ちを奮い立たせたりしています。ただ賃金を得るだけの仕事ではなく、人間として色々な事を勉強させてくれるこの職に、巡り会えた事は素直に良かったと思っています。

この人達は叫ばないし、語らない。彼らの状況を良しとするも、悪しとするも携わっている私達の考え方一つであると思います。ビジョンを高く持つ事の大切さを感じます。ひよつとしたら来年の桜は、今年以上にすばらしいかも。

( 介助員 )

お兄ちゃんと私

山田 恵美

私は以前、本紙に掲載されていた鈴木順子さんの文章を読ませて頂き、私も兄が障害を持つという同じ立場でこれからの事について考えさせられました。

私は今まで結婚生活、そして兄の面倒をみていくというように考えていました。ですから将来、結婚相手にも兄の事をきちんと話し、理解を得た上だと思っていました。しかし、鈴木さんの「兄妹はお互いに支え合っていく関係」という言葉にハッとさせられました。確かに兄はこの先、一人では生きていけないでしょう。誰かの助けや支えがなければ。また、今までの私の兄に対する気持ちはたつた二人の兄妹、私が兄をみていかなければならないという一方的なもので、決して支え合うというものではなかったと気づきました。

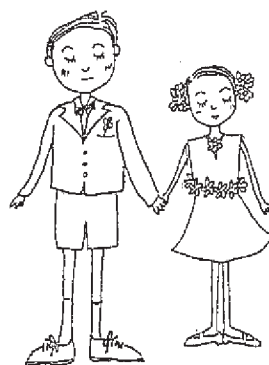
兄には時々、興奮し暴れた時にパニックをおこしガラスを割ったり、包丁をもつ等、筆舌に尽くし難い大変さがありました。母も私もこの先どうなってしまうのだろうと常に不安の日々でした。ですから兄が自分で出来る事にも手を出してしまいがちでした。また、電車の中にひとりである知的障害者の方を見ると羨ましいと同時に兄には無理だろうという勝手な諦めの気持ちもありました。が、最近の兄は何か要求する時「お母さん、御飯作る」から「御飯作ってください」という表現になり、食事の準備も手伝ってくれるようになりました。

母は一昨年の春、再婚しました。新しい父は兄に対し、時には厳しく、優しく一人の人間として接しています。私も今は兄の可能性を信じ、前向きに考えよう、そして永い永いこれからの人生、

肩の力を抜いてリラックスしながらいこうと考えられるようになりました。

私はこの三月に看護学校を卒業しました。まだまだ未熟者で社会の一員となること、人の命を守るといふ事の重大さでこれから先不安で一杯です。しかし、臨床実習を通して、様々な家庭の事情を知り、人と人との触れ合い、助け合いが大切なんだということを実感できました。今後も、色々な方の意見や考えを聴き、視野を広くしながら自分を磨き、家庭で切磋琢磨し支え合っていくと思ひます。

( 山田 賢治・妹 )



編集後記

桜とともに迎えた新年度も新緑の季節になり、寮生さんの作業風景にも季節の変化を感じます。半袖の作業服、そこから見える腕も褐色に色付き始めました。その風景の中に新しい職員も加わり、ますます活気付いています。

私は今年度よりこの広報紙に携わっていますが、日中色付いた顔色を青や赤に染えながら悪戦苦闘しています。

初めて感じる「佑啓」完成の喜びとともに、第二十九号をお届けします。

堀金 兼太郎